

個別に SMT を行う際には、たとえば、ADS 値が 100 CFU/Strip (SMT スコア = 2) 以上の場合には、変動を考慮して複数回実施する必要性が示唆された。

演題 3. 口腔領域の各種疾患に対する骨移植の臨床統計的観察

○岡田 勝志, 宮手 浩樹, 石川 義人
降旗 球司, 古川 康憲, 福田 喜安
横田 光正, 大屋 高德, 工藤 啓吾

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

われわれは 1980 年から 1996 年までの過去 17 年間に口腔領域における種々の疾患における術後の下顎骨欠損に対し、骨移植術を施行してきた。そこで、今回は本期間内に施行した 94 例を臨床統計的に観察し、今後の骨移植に関する適応やその成績を検討する資料とすることを目的に集計した。

これら 94 例は男性 54 例、女性 40 例、年齢は 12 歳から 76 歳であった。疾患別では下顎骨の嚢胞 29 例、良性腫瘍 29 例、骨髄炎 18 例、悪性腫瘍 14 例などであった。これらに対する手術は摘出 40 例、区域切除 19 例、辺縁切除 3 例、その他の切除が 15 例、骨折および腐骨除去などが 5 例であった。移植骨の種類は海綿骨細片が 76 例と最も多く、次いでブロック骨が 18 例およびこれら移植骨の併用が 7 例などの順であった。なお、金属プレートなどの移植骨固定材は 29 例に併用されていた。

その結果、骨移植を行った上記疾患は、下顎の良性疾患 80 例と悪性疾患 14 例とに大別して検討すると、良性疾患では下顎骨骨髄炎の搔爬や腫瘍摘出後の空洞状骨欠損および下顎骨辺縁切除などの非連続性骨欠損に対する海綿骨細片の移植が区域切除と片側切除後の連続性骨欠損に対する移植に比べてより多かった。一方、悪性疾患では、これら下顎骨の非連続性骨欠損と連続性骨欠損の形態や、海綿骨細片とブロック骨など移植骨の種類においては、特に差異が認められない傾向にあった。

演題 4. 高等学校生徒の口臭に関する意識と口腔内状況の関連性

○相沢 文恵, 岸 光男, 米満 正美

岩手医科大学歯学部予防歯科学講座

近年、若年層を中心として口臭に対する関心が高まっており、口臭を防ぐ商品も店頭を賑わしている。一方では、自分の口臭を過度に意識する自臭症も報告されている。口臭は他人から指摘されて気付くことが多いことから、会話する距離が近い学生時代は口臭に特に敏感になる時期であると考えられる。このようなことから、我々は 1997 年 5 月、宮城県内の某高等学校の生徒 529 名を対象に口臭、歯科保健行動、一般的な保健行動、口腔関連の自覚症状に関する質問紙調査を実施した。また、学校歯科健診時に 1 年生と 2 年生から無作為に抽出した 125 名を対象に PMA 及び DI-S の診査を行い、口臭に対する心配と口腔内の状況及び上述の約 30 の質問項目各々に対する回答との関わりを分析した。

口腔診査の結果、DMFT は 8.3 ± 5.1 、PMA、DI-S の平均は各々 4.3 ± 3.6 、 0.8 ± 0.5 であり、DMFT、DI-S では男女間に有意差が認められた。また、自分の口臭が心配になることが「よくある人」は全体の 12.9% あり、男女間に差は認められなかった。ついで、口臭に対する心配の頻度と口腔内の状況の関連性を分析した結果、口臭に対する心配が頻繁にある人の PMA が有意に低いことが認められた。また、口臭の感じ方には個人差があり、口腔内を客観的に評価する DMF や PMA 等とは必ずしも一致せず、むしろ、歯または歯ぐきの痛みや口腔内の乾燥感など、口腔に対する主観的な認識の結果である自覚症状と強く関連することが認められた。

これらのことから、自分の口臭を感じるか否かには心理的な要因が強く関わっており、口腔に対する関心度が高い人ほど口臭に対する心配が強い傾向にあることが示された。したがって、現在増加しつつある「他覚的には認識されない口臭を気にする人」に適切に対応していくためには、口臭を意識する頻度や状況に関わる要因を検討し、行動科学的なアプローチをしていくことが必要になってくると考えられた。